

第4回チュウヒ報告会

2021年10月28日(木) 14:00-16:00

定住支援センター多目的ホール 天塩郡豊富町西東1条6丁目

主催：環境省北海道地方環境事務所

協力：日本野鳥の会 日本野鳥の会道北支部 後援：豊富町

14:00 開会

司会：吉原努（NPO 法人サロベツ・エコ・ネットワーク事務局次長）

・挨拶 柴原崇（稚内自然保護官事務所国立公園保護管理企画官）

講演

14:05-14:55

・人も自然も元気に～里山のタカ・サシバをシンボルにしたまちづくり～
遠藤孝一（公財）日本野鳥の会

14:55-15:25

・サロベツにおけるチュウヒの繁殖状況
長谷部真（NPO 法人サロベツ・エコ・ネットワーク）

休憩

15:25-15:30

対談

15:30-16:00

・講演者への質疑応答

・チュウヒを通じた地域活性化 コーディネーター 長谷部真

対談者：遠藤孝一 若松徹 長谷部真

閉会 16:00

講演要旨

人も自然も元気に ～里山のタカ・サシバをシンボルにしたまちづくり～

遠藤孝一（日本野鳥の会・オオタカ保護基金・サシバの里協議会）

近年、地域の特徴的な生きものをシンボルに地域振興と生態系の保全を両立させながら、持続可能なまちづくりを進める自治体が増えている。野鳥ではコウノトリやトキ、ガン類などが有名であるが、栃木県市貝町では、里山のタカ・サシバを町のシンボルとして位置づけ、自然共生型のまちづくりに取り組んでいる。

市貝町は、北関東の栃木県東部に位置する面積 64 平方キロ、人口 1 万 1 千人の小さな町だ。里地里山が広がるこの町が、サシバの繁殖地として知られるようになったのは 2000 年前後。オオタカ保護基金の調査によると、2009 年には 25 平方キロで 26 つがいの生息が確認されており、この密度は日本一と言われている。

同町やその周辺にサシバが高密度で生息しているのは、丘陵地に食い込むような細長い田んぼ（谷津田）が数多くあるからだ。谷津田は林に接する部分が多く、サシバの餌になる小動物が多いうえ、営巣木に適した木も豊富である。この里地里山環境を作り、維持してきた農林業であったが、近年では農林業家の高齢化や減少によって耕作放棄地や利用されなくなった山林が増えており、この自然豊かな環境も変容しつつある。

そこで、同町ではサシバがすむ自然豊かな里地里山を貴重な地域資源として位置づけ、それを生かしながら農林業などを中心とした持続的な産業を発展させて、まちを次の世代に繋げていく取組みを 2010 年から始めた。

2013 年度には「サシバの里づくり基本構想」（2014 年度～18 年度）、2018 年度に「第 2 次サシバの里づくり基本構想・実施計画」（構想：2019 年度～28 年度、計画：2019 年度～24 年度）を策定し、具体的な取組を進めている。

「サシバの里協議会」と道の駅「サシバの里いちかい」が 2014 年に、オオタカ保護基金の「サシバの里自然学校」が 2016 年にそれぞれ設立・開設された。これらの組織や施設では、独自にあるいは様々な団体と協力しながら、里地里山を生かした様々なグリーンツーリズムを展開している。道の駅の直売所では 2019 年から、農薬や化学肥料を抑えたブランド米「サシバのふるさと」が販売開始された。また里地里山保全では、現在「（仮）市貝町里地里山保全条例」の策定が進んでいる。保全を進めるための調査としては、2020 年には市貝町全域を対象に「サシバ生息状況調査」行われ、今後はサシバのみならず希少な動植物については、その生息・生育状況も定期的に把握する予定だ。さらに 2019 年に「いちかいサシバの里づくり基金」が創設され、今後は、構想全体をより強力に進めるための推進組織の設立も検討されている。

市貝町では、農林業者、商業者、道の駅、観光協会、役場、環境保護団体などが連携しながら、サシバの里づくりを進めている。

サロベツにおけるチュウヒの繁殖状況
NPO 法人サロベツ・エコ・ネットワーク
長谷部真

チュウヒはサロベツ周辺では4月から10月まで滞在する夏鳥で、主にササ原で繁殖し、河川や湖沼沿い・海岸草原・牧草地を利用します。国内で唯一湿地に繁殖するタカの仲間で、絶滅が危惧されているため種の保存法で保護されています。サロベツ周辺はチュウヒの繁殖地として国内最大規模です。

2021年は4月から8月まで計43日間調査を行い、餌運び等の繁殖行動がみられた営巣地を40箇所特定したほか、巣への出入りなどにより繁殖の可能性のある場所を16箇所確認しました（日本野鳥の会・環境省事業）。2021年は最も多くの巣が発見された2020年（58箇所）より少なくなりました。繁殖の可能性のある場所を含めると幌延町が22(26)箇所（括弧内は2020年の巣数を示す）と最も多く、豊富町が17(18)、天塩町が11(13)、稚内市で6(6)、遠別町1(1)箇所でした。稚内市、遠別町以外は巣数が減少しました。確認した巣のうちその後の繁殖の動向を追跡できた巣の繁殖成功率は53%で、72%だった2020年より減少しました。繁殖数や繁殖成功率が減少した原因は餌資源が豊富だった2021年と比較して餌資源の減少したことが考えられます。調査地の平均巣立ち雛数は1.8羽で2020年とほぼ同じでした。確認した巣のうちの国立公園内の割合は28%で、2021年以前と同様の結果でした。このため、国立公園外におけるチュウヒの繁殖地の保全が重要となります。

2021年も前年に引き続き、行政機関と一部民間事業者に対し、チュウヒの繁殖情報の提供を行いました。事前に連絡調整を行うことができた繁殖地では、工事の開始時期を変更する、チュウヒ調査を実施する、監視員を配置しチュウヒに異常行動がみられないか確認するなど、チュウヒの繁殖に可能な限り配慮しながら開発事業が進められたため、チュウヒの繁殖への影響はあまり確認されませんでした。対応に差が見られましたが、多くの行政機関と連絡を取り合えるようになりました。民間事業者にも事前に連絡を取り、工事時期をずらすなど繁殖への配慮がなされていましたが、繁殖が確認されない場所がありました。過去に開発事業により一度繁殖を放棄した場所でも、その後の配慮の結果、繁殖を再開・成功した事例もありました。

以上のことから、行政機関や民間事業者との間でチュウヒの繁殖に関する情報共有が行われ、その結果繁殖への配慮がなされれば、開発行為による影響が低減され、開発行為とのチュウヒとの共存が可能であることがわかりました。今後はチュウヒの保全のために農家への情報共有と理解を得ることが重要です。また、チュウヒが経年的に繁殖利用している場所を購入しチュウヒの繁殖地を積極的に保護していくことも検討しています。

これまで普及啓発を目的にチュウヒのパフレットやステッカーを作成してきました（環境省・日本野鳥の会事業）。2021年には新たにサロベツ湿原センターでチュウヒぬいぐるみやポスター展示を行いました（日本野鳥の会事業）。今後もチュウヒに関連する商品の開発により、チュウヒの保護に関する地域理解の促進に取り組み、チュウヒよる町興しにつなげていきたいと思っています。